

SONRISA

そんりさ

vol.162



エルサルバドル
昔と今

エルサルバドル・モラサン県チランガの生活改善運動サークル
隣の人の長所を述べて抱き合う。例会を重ね信頼感が深まった

02	エルサルバドル 昔と今	……藤井 満
07	メキシコ・ナルコ回廊をゆく 2017～ベラクルス（その1）	……山本 昭代
11	グアテマラ・アップデート 政治危機に再び燃え上がる抗議の叫び	…新川志保子
14	ボリビア民話：コカはみんなから求められました	……栗原 重太
15	ペルー音楽 「知られざるペルー・ポレロの世界」	……水口 良樹
17	メキシコの食巡り チラキレス	……ミゲル・アクーニャ
18	ムネちゃんのLA情報拾い読み・斜め読み	……小林 致広

コロモンカグア難民キャンプのムラ

1980年代、エルサルバドル北東部のモラサン県は、左翼ゲリラであるファラブンド・マルチ民族解放戦線（FMLN）が強力であった激戦地の一つだった。1988年、学生だった私は、ゲリラの解放区に近づいてみたくて、南のサンミゲルからバスに乗った。当然ながら、検問で軍に捕まった。

そこで翌1989年1月、ホンジュラス側にあるコロモンカグア難民キャンプを訪ねた。ホンジュラスの首都テグシガルパからバスとヒッチハイクで、国境の村コロモンカグアまで11時間かかった。国連難民高等弁務官（UNHCR）の事務所に泊めてもらい、翌朝に3キロ離れたキャンプに向かった。

軍の検問を抜け、小さな丘を回り込むと、乾燥した斜面いっぱい木造バラックが現れた。約8,000人が暮らしているという。インタビューを申し込むと、100人近い人たちが集まって、歓迎の音楽会が始まった。それから、バイオリンやギター、靴、ベッドなどを手作りする工房を案内された。

難民たちは、軍の弾圧によって1980年末から国境を越えてきた。貧しい農民だから集団生活の経験はないが、援助食糧を分配し、数家族にひとつの割合で配られた大鍋で、共同で調理しているうちに、グループが形成された。難民のなかにいたFMLN支持者らが指導的な役割を果たし、自治組織をつくりあげたのである。

その活動はとくに教育分野で成果をあげた。当初15%程度しか読み書きができなかったが、キャンプ内に小学校が設けられ、成人学級が開かれ、難民自身の教師が養成された。こうした「裸足の教師」は350人を数えた。数年で識字率は9割に達した。「松



歓迎演奏会には100人以上が集まった

の木の下でバナナの葉をノートにして勉強した。キャンプの生活は楽しかった」と若者たちは語った。

難民たちはエルサルバドル軍の弾圧の犠牲者だから、FMLNを支持していた。ホンジュラス軍は「難民が薬や食糧をFMLNに横流ししている」と主張し、キャンプ内に何度も侵入していた。「ホンジュラス軍に囲まれて外出なんかできない」「6割が子どものキャンプで、ゲリラを助ける余力はない」と、難民側はゲリラとの関係を否定していた。

キャンプでとりわけ印象に残ったのが、バイオリンやギター、コントラバスで構成された楽団だった。軍の弾圧やキャンプでの生活、識字運動などをオリジナルの歌に仕立てていた。

私が訪ねた4カ月後の1989年5月、自治組織は帰国を求め、ホンジュラスやエルサルバドル政府との交渉を始めた。ゲリラの「最終攻勢」もあって暗礁に乗り上げかけていた11月、難民たちは実力行使に出た。約700人が行進し、軍の検問を突破し国境を越えてしまった。これによって交渉は進み、1990年2月に集団帰還が実現した。

帰還難民の村「セグンド・モンテス共同体」

帰還先のメアングーラという地域は、政府軍とFMLN支配地域の実質的境界だったトロラ川よりわずかに北（FMLN側）に位置し、戦略的にも重要だった。帰還難民の村はセグンド・モンテス共同体

【1989年に虐殺された中米大学人権問題研究所長の神父の名】と名づけられた。学校や図書館、サッカー場などの公共施設を囲んで、住宅が配置され、養豚や養鶏、難民キャンプで覚えた家具や靴の工房も開かれた。情報発信のためFM放送局も開局し、独自のバスも運行していた。



シクストも働いていた靴工房 乾燥した斜面にトイレをつくる

帰還から8年後の1998年、私はセグンド・モンテス共同体を訪ねた。養豚・養鶏施設は消え、バスは売却され、靴や服の工房も中国製品に負けて潰れていた。続いているのはラジオ局とパン工房ぐらいだったが、楽団は健在だった。ベルギー人女性が指導し、旧メンバーは音楽学校の講師もつとめていた。

バンドメンバーとコロモンカグアの難民キャンプ跡を訪問した。メンバーの1人は谷川の水をくみながら、「この谷を通して食糧や薬品を運んだんだ。見つからないようにするのが大変だった」と言った。やはりゲリラを支援していたのである。シクスト・ビヒルは「僕はミツルが来たころにはキャンプにいなかったよ」と言った。シクストは、キャンプの靴工場で働いたあと、12歳で政治教育を受け、13歳の時に友人15人と夜間キャンプを脱け出し、ゲリラになった。特殊部隊として従軍していた1988年に足に被弾し、首都に運ばれた。48人の同志とともにメキシコ大使館を占拠

した。18歳でキューバへ渡り手術を受け、そこで妻子をつくり、内戦終結後の1992年にエルサルバドルに帰国した。1998年当時は働きながら国立大学で会計学を学んでいた。

19年ぶりのセグンド・モンテス共同体訪問

2017年5月、19年ぶりにセグンド・モンテス共同体を訪ねることができた。楽団もラジオ局も健在で、パン工房は21年前に撮影したセニョーラを中心に運営、6人の若者を雇っている。日本人の海外協力隊員のおかげで、15人が働く縫製工場も立ち上がっていた。町には大学も誘致され、共同体としてのまとまりは弱まったが、ふつうの町として栄えていた。

45歳になったシクストを訪ねると、家の前に近所の住民たちが群がっていった。シクストのポンコツ車が坂を転がり、石塀にぶつかって大破したのだ。ゲリラとして生死の境をくぐり抜けてきた彼が、あわてふためいているのがおかしかった。

彼は今、戦争でけがをした軍人・ゲリラ・市民に年金を支給する基金に勤めている。彼自身も受給者である。元軍人が窓口に来ると、最初はお互いに緊張したという。

翌日の夜、みんなでビールを飲みながら、「奥さんはどうしてる？」と尋ねると、「どの？」と言う。まわりが大笑いしはじめた。「シクスト(6番目という意味)はこれまで5人の奥さんがいて、6人の子がいるのよ。今は罰が当たって一人暮らしよ」。「次の奥さんは、シクスタじゃないか」と言うと、「もう孫もいるんだ。これ以上の妻はいらないよ」

だが、その場から女性がいなくなると、「日本語を勉強したいから、女の子を紹介してくれよ。オレも紹介するからさ」だって。誠実で、明るくて、頭が切れて、女癖以外はすばらしい人間なのだけど……。

ゲリラの首都ペルキン

かつて「ゲリラの首都」と呼ばれたモラサン県ペルキンには、今ではFMLNの元ゲリラたちがつくった「革命博物館」や難民を支援してきた米



7年前に歓迎演奏会をした場所でポーズをとるバンドメンバー



難民キャンプ跡で弁当を食べるシクスト・ビヒル(右)ら



バンドメンバーは子ども向けの音楽教室の講師もつとめる



セグンド・モンテス学校の女生徒。19年後は貫禄あるセニョーラ



21年前に撮影のセニョーラを中心にパン工房は健在



21年前のセニョーラ

国人が経営するペルキン・レンカという快適なホテルがある。内戦の歴史に興味をもつ外国人観光客が訪れ、独特の体験旅行の拠点になっている。10分も歩けば反対側に横断できてしまう標高1,200メートルの小さなまちには、農民の生活を描いた壁画が美しい。

1980年代は政府軍の空爆でがれきだらけだったが、破壊を免れた壁には、農民の暮らしや革命の希望が描かれていた。1991年に軍が一時占拠した際に、それらの壁画は破壊されてしまった。内戦終結後に赴任した保守派の聖職者によって、教会の壁画も消されてしまった。しかし、2003年から来たアルゼンチン人芸術家の指導で教会の壁画は復活されている。

ペルキンの10キロ南東にあるモソテという集落は、1981年12月に起きた虐殺事件で知られている。米軍特殊部隊の指導で創設された対ゲリラ戦部隊アトラカトル大隊が、老人から赤ん坊まで住民約千人を皆殺しにしたとされる。たった一人生き残った女性の証言をFMLNの「ラジオ・ベンセレーモス」が放送し、それを聞いたアメリカ人のジャーナリストが現地を訪ねて世界に伝えたのである。

今では、虐殺現場には記念碑がつけられ、語り部が旅行者を案内してくれる。一方、ペルキンの町にある「革命博物館」では、FMLNの元ゲリラが1992年の和平合意までの歴史を語ってくれる。

ゲリラの組織活動は1970年代にはじまり、オスカル・ロメロ大司教が暗殺された1980年から本格的に蜂起した。主要な武器はFALという自動小銃だった。1979年のニカラグア革命の前までは、ベネズエラがニカラグアのサンディニスタ民族解放戦線（FSLN）にFALを供給していた。サンディニスタ革命が成功すると、ニカラグアがソ連のAK自動小銃を導入することになった。その結果、FSLNが使わなくなったFALがエルサルバドルのゲリラに流れてきた。その後、エルサルバドル政府軍が米国製M16自動小銃を採用すると、FMLNは同じ口径の弾丸を使っているAR15をベトナムから導入したという。1989年の「最終攻勢」直前、ゲリラ側の武器はほとんど枯渇して

いた。そこで司令官を北朝鮮に派遣し、AK自動小銃を大量に買い付けた。北朝鮮からニカラグアまでAK自動小銃を運び、他の荷物などと混ぜて偽装し、コスタリカを経由し、エルサルバドルのアカフトラ港に水揚げした。

1984年には、モソテ虐殺を指揮したアトラカトル大隊のドミンゴ・モンテロサ大佐に対して、FMLNは罨を張った。当時、政府軍の攻略目標のひとつがラジオ・ベンセレーモスだった。ホアテカという村の山中に、ラジオ送信機や背囊、小銃などを散乱させ、ニワトリの血をまいた。送信機にはTNT火薬を詰めておいた。そして「RV（ラジオベンセレーモス）に問題発生」と発信したのである。軍は「ラジオ局奪取」を記者発表する段取りをつけ、接收した送信機などをヘリコプター



町のあちこちに鮮やかな壁画が描かれている



虐殺現場の教会は建て替えられた



セバスチャントロゴスは元ゲリラ、従軍しながら音楽活動をしていた。今はモソテの語り部をつとめる



「革命博物館」案内人で館長のローランド・カセレス

に積み離陸した。その直後、ヘリは爆発し、モンテロサ大佐も死亡した。墜落したヘリの残骸は革命博物館に展示されている。

武器の経路や裏話についてやけに詳しいと思ったら、博物館の案内人兼館長のローランド・カセレス（57歳）はニカラグア人で、15歳からサンディニスタのゲリラ活動に参加していた。革命後1980年にエルサルバドルに来て、軍事教練の教官を務めてきた。モラサン県のゲリラの生みの親のような存在だ。

「大量の写真や文書があるが、すべては公開していない。どこに保管しているとも言えない。FMLN内部の問題も含めて、戦争の傷が癒えるにはまだまだ長い時間がかかるんだよ」と、最後にローランドは言った。

今も、モンテロサのヘリコプターの残骸前で最敬礼する元軍人がいる。残骸の前で泣いていた女性性は、「あなたたちには申し訳ないけど、モンテロサは私の父なの」と語ったという。

生活改善の成果

モラサン県で生活改善の現場をいくつか訪問した。ホンジュラス国境に近いトロラの山の集落に住む女性グレンダ（26歳）は2年ほど前、何か援助があると期待して「生活改善」の説明会に参加した。「能力開発だけで、なにも援助はありません」と言われ、最初はがっかりしたが、15人のサークルの例会には欠かさず通った。生活の現状を把握し、どんな暮らしをしたいかを絵に描いてイメージする。それに向け何ができるかを考え、小さなことから始める。たとえばコーラなどの清涼飲料や揚げ菓子が体に悪いと知って、庭のオレンジの果汁と水で飲料を作り、子どもに与えるようにした。

トウモロコシとフリホールは栽培していたが、野菜は市場で購入していた。家の周囲にトマトやトウガラシ、ハウレンソウ、チピリンなどをつくり、果物の木を植えた。浮いたカネは貯金にまわした。それまでは手元に現金があると、服やアクセサリを衝動買いし、貯金の経験はなかった。9歳と11歳の子にも貯金させて、学校に通うリュ

ックを買わせた。

そうやって貯めた現金で、土の床をコンクリートで固めた。日干しレンガの壁は、ゴキブリやネズミが出入りできないよう漆喰で塗り固めた。今、掃除が行き届いた白壁の部屋には、こぎれいなベッドが並んでいる。庭にはバラなどの花を植え、半分に切ったペットボトルを軒下に吊り、花を植えている。家や庭が美しくなると人を招きたくなる。近所の人との付き合いも目に見えて増えた。携帯電話やテレビはない。それ以上に必要なものがあるし、携帯に時間がとられるのは子どもによくないと思うからだ。

「お金がないから貧しいんじゃない。貧困とは心の貧しさです」「幸せはお金の多寡ではない。どんなエリートでも夫が家に帰ってこないんじゃない。うちの夫は家の仕事も一緒にしてくれるし、幸せです」そんな言葉が彼女の口から流れるように出てきた。近くの彼女の父母も生活改善運動に参加している。

ダニエル（52歳）は難民だったが、帰国後しばらくして、2000年にこの地に入植した。やぶだらけの山を切り開き、オレンジやレモン、バナナ、カカオ、ランブータンやライチを植えた。バナナはフィリピンやホンジュラスの品種、地元の品種などさまざま。失われた品種の復活にも取り組んでいる。25種類の果樹がたわわに実る山は、かつて訪れた愛媛の自然農法家、福岡正信さんの山に似ていると思った。

ダニエルの家は昔ながらの日干しレンガの壁で土の床だ。2015年からサークルに参加して何が変わったのかと尋ねると、真っ先に夫婦関係をあげた。

以前は「台所や掃除を男がするもんじゃないと思っていた」。子どもの世話もまかせきり。ベッドの整頓もしたことがない。「だれよりも遅く起きて、だれよりも早く寝ていたよ」と笑う。奥さんは「忙しくても夫に水をくんで来てなんて頼めなかった。家のことを手伝えなんてこわくて言えなかった」と言う。

生活改善サークルに夫婦で参加し、合理的な生活をどう実現するかを学んできた。今は自分の服



日干しレンガで土の床の家は
コンクリート床と白壁に
生活改善を通して夫婦仲が
深まったと語るダニエル



は自分で洗濯する。「私が命令したら、何でもちゃんとやってくれる。幸せだよ」と奥さん。「生活改善の意味は、土地を知り家族を知ること。家庭での責任を考えれば、やるべきことは見えてくる。今は2人で家族を支える責任を担っている。2人の関係がより近づいたんだ」

ダニエルはそう言って、妻の肩を抱いた。

戦争の傷跡

30歳代の生活改善推進員アンニバルのバイクに乗って、チランガという町の郊外にある小さな集落を訪ねた。遠くまで山並みを見渡せる山上にある。集会所には14、5人の女性と20人近い子どもが集まり、庭でププサを焼いている。材料のトウモロコシやチーズ、キャベツ、ニンジンみんなで持ち寄った。2016年1月にサークル活動を始め、これまで11回の例会を重ねてきた。今回初めて軽食を食べる会を開いた。生活改善で何が変わったの？ とみんなに尋ねてみた。

「庭にマンゴやパイヤなどの木を植えることを学んだ」「家を整理整頓すること」「朝から晩まで働き詰めだったけど、時間を工夫して午後1時間の休憩をとれるようになった」……さまざまな意見があつたが、だれもが必ず「人と話すことが楽しい」「昔は近所の人とコミュニケーションがなかったが、今はみんなで集えるようになった」と言った。

「田舎なのに、近所の人とのつきあいはなかったの？」と聞くと、「余計なことを喋ったら、何か起きるのではないかと怖かった」。

55歳の女性は「戦争よ」と付け加えた。トロラ川より北はFMLNが優勢だったが、爆撃や政府軍の侵入は日常茶飯事だった。「ゲリラのコントロール下というのは、政府軍を締め出したわけではなく、侵入しても長時間滞在できないという意味。だから、政府軍は民間人も殺し、出て行かせようとした」と元ゲリラの男性は説明した。

サークルは11回の例会を重ね、お互いに気持ちを語れるようになってきた。だからこそ食事会が実現したのだという。グループの力で戦争の傷を癒やしつつあったのだ。

日本の農村でも、1950年代や60年代、若妻たちは孤独だった。15年前に会った愛媛県の女性を思い出した。家のことも田畑も、義父母の言うがまま。自由はゼロ。そんなときに生活改善のグループに出会い、小さな畑を自由につくることができた。その畑だけが自由を感じられる場だった。小さな畑でさまざまな野菜をつくった経験が、30年後の直売所づくりにつながった。

日本とエルサルバドルの状況は異なるが、メンバーの信頼感が基礎にあることは共通している。

推進員アンニバルは元牛飼いで、パソコンも使えなかった。面接を受けて推進員になり、1時間半歩いて集落に通っていたが、仕事のため最近バイクを買った。

「生活改善は自分自身もコミュニティの人たちと一緒に成長できる」「長年チランガに住んでも、知り合いは少なかった。でも活動を始めて友達だらけになった」と、うれしそうだ。

約20分の道中、バイクや歩行者とすれ違うたびにクラクションを鳴らし、あいさつを交わしていた。



会合の間は、推進員の1人が子どもたちを外で遊ばせる

恒例となった夏休みのメキシコ訪問。今年は前から気になっていたベラクルス州を訪れた。メキシコ湾岸の港湾都市であるベラクルス市郊外において大規模な秘密墓地の存在が明らかになり、昨年8月から、行方不明の家族を探して、市民らが自ら発掘作業を行っているのだ。

ベラクルス州は、メキシコ東部、メキシコ湾に沿った縦に細長い州である。沿岸部は亜熱帯多雨で、豊かな農地に恵まれ、内陸に行くと東マドレ山脈につながる険しい山地帯がある。州境にはメキシコの最高峰、5,700mのオリサバ山がそびえる。残念ながら今回はハリケーンの影響による雨続きで、万年雪を頂いている美しい山容は拝めなかった。

この地はスペインの征服者エルナン・コルテスが最初に上陸した地である。なかでもベラクルス市は重要な国際港湾都市であるとともに、コロニアル建築の街並みとビーチが国内外からの観光客を集めている。

それが、組織犯罪の血を血で洗う抗争と汚職の噂にまみれた暗いイメージで語られるようになったのは、とくに前ハビエル・ドゥアルテ州知事時代【2009年12月～2016年10月在任、辞任直後国外逃亡、2017年4月グアテマラで逮捕、7月メキシコへ送還】からである。

ベラクルス州は、長い沿岸部が麻薬密輸の経由地として利用され、山地ではケシやマリワナといった麻薬が栽培され、覚せい剤が密造される。さらに北を目指す中米からの不法移民の移動ルートにもあたっている。法によって保護されていない弱い立場の中米移民たちは、組織犯罪にとっては格好のカモなのだ。拉致監禁して北米にいる家族に身代金を要求したり、人身売買したりする。

組織間抗争と警察の腐敗

2000年代まではベラクルス州といえば、残虐さで知られたロス・セタスの独占的なテリトリーだった。それが、ロス・セタスのトップが次々に逮捕されたり殺害されたりし、内部分裂もあって弱体化したとみると、メキシコ西部に勢力を拡張していたハリスコ新世代カルテルが、2011年頃からこの地に入り込んできたのである。ハリスコ新世代は、その名の通り、ハリスコ州を根拠地とするナルコ組織である。北ではシナロア・カルテルと張り合い、南のミチョアカン州では自警団の一部と組んで、テンプル騎士団カルテルを打倒し、現在ではメキシコ国内最大のナルコ勢力となっていた。

2011年9月、ベラクルス市のすぐ南のボカ・デル・リオ市の中心街に35人もの遺体が放置され、数日後には14人もの遺体がベラクルス市内の各地で見つかった。当時のドゥアルテ知事は、「遺体はみな犯罪者たちだ」と決めつける発言をしたが、実際には多くは学生など犯罪とは無関係な人たちだった。

ナルコ組織間の抗争は、このような見せしめ合戦だけではなく。商店や農場主などからの「みかじめ料」の取り立て、身代金目的の誘拐など、一般市民を巻き込む形で、その残虐さを極めていった。軍・警察・公務員などはいずれかの組織の支配下に置かれるとともに、ナルコ組織関連の事件や当局の汚職を暴こうとするジャーナリストたちも次々に脅迫され、殺害されるようになった。

ドゥアルテ政権下だけでも、殺害されたジャーナリストは17人にのぼり、脅されて州外や国外に逃れた記者も少なくない。ベラクルス州は「記者の墓場」とまで呼ばれるほどだ。



市役所前に置かれた暴力の犠牲になったジャーナリストのための彩色岩の記念碑



ベラクルスの州都ハラパ市は、特産のコーヒーの香りが流れる穏やかな街である。しかしここも暴力とは無縁ではない。それを象徴するひとつが、市役所の入り口に置かれているカラフルにペイントされた岩だ。地元の記者らが置いたもので、岩の上には、カメラの絵と「殉職者たちの記念碑」、「すべての人に正義を」という言葉が書かれている。

市役所の隣にある大聖堂の前の広場【正式名はレルド広場】には、「レヒーナ・マルティネス広場」と刻んだプレートが市民らの手で埋め込まれた。残虐に殺害されながら、当局が強盗殺人として片付け、人格を貶めるような嘘の発表までされた女性記者の名前を広場の名前として市民が勝手に付け変えたのだ。

母の日の贈り物？

犯罪組織の抗争が激化するなか、各地で行方不明になる人が次々に出てきた。状況は様々だが、共通するのは、当局に訴えてもほとんど捜査がなされなかったり、逆に脅迫されたりすることである。殺害事件の被害者家族は当然ながら悲壮だが、行方不明被害の家族の苦しみも筆舌に尽くせない。

行方不明の息子を持つ女性のひとりには、「毎日、朝起きた時から、息子は、今日はどこでどうしているだろうか、早く見つけてやらなくては、と考えている」と涙を浮かべて語ってくれた。どのようなかたちであれ、その姿が見つかるまで、苦悩に区切りがつくことはないのだ。

そのような行方不明者家族の女性たちのグループが、犯罪組織が犠牲者を埋めたとみられる秘密墓を発見し、自ら発掘作業を行っているという報道がされた。メキシコシティの友人のついで、この勇気ある女性たちのグループのリーダーであるルシア・ディアス・ヘナオさんとコンタクトが取れ、ベラクルスに会いに行った。

その会の名前は「ソレシート」で、小さな太陽、という意味だ。最初は行方不明家族の女性たち 6、7人がネット上でつながっていただけだったが、報道などがきっかけで、同じ立場の人々が集まり、今はベラクルス州の中部を中心に 250 人以上のメンバーがいる。

ルシアの息子、ルイスは 4 年前の 2013 年 6 月、29 歳の時、病気で寝ていた自宅から武装集団に拉致され、行方不明になった。ルイスは人気 DJ で、イベントプロデューサーとしても州内外で活躍していた。身代金の請求が 2 度も来て、そのたびに支払った。さらに息子のバンも要求され、それも引き渡した。しかし、息子は戻ってこなかった。

主婦だったルシアの生活は一変した。毎日警察や関係機関のさまざまな部門を訪ね、捜査を要請し、自分で独自に捜査もした。息子の携帯電話は、彼女自身がフリーマーケットで見つけた。警察は何も調べてくれなかった。自動車も、捜索する気になればすぐ見つかるはずなのに、当局は何もしなかった。むしろ家族の独自の捜査を邪魔してくるのだ。結局、警察もグルなのだ実感したという。

2016 年 5 月、母の日に、ソレシートの女性たちはベラクルス市でデモを行おうとしていた。そのとき、一台の軽トラックが近づき、女性たちに地図のコピーを手渡していった。無数の十字が書き込まれた手書きの地図だった。「サンタ・フェの丘」と呼ばれる地区の地図だった。そこに秘密墓地があるらしいという話はうわさで聞いていたので、ルシアにとってその地図は確信を裏付けるものとなった。

当局と交渉し、その年の 8 月から発掘作業が

始まった。「最初の3日間、私たちは発掘に参加させてもらえず、検察庁の捜査官らが掘っているのを見ているだけだった。しかし、彼らが見つけれないので、私たちが自分たちで作業したいと申し入れ、作業を始めると、次々に遺体を発見した」

それ以来1年間、毎日発掘作業を行い、今年8月半ばの時点までに発見された遺体は277体である。ひとつの場所からこれほどの数の遺体が見つかったのはメキシコ国内ではほかにない。しかし、そのなかで身元が判明したのは、私が訪問した時点で、わずか5体だけだった。DNA鑑定は司法警察が行っており、それに時間がかかるためである。

現場での作業を継続するには、地道な資金調達が必要になる。警察や人権委員会からは、食事の提供や現場までの送り迎えの車は出してもらっているが、それ以外の公的支援はない。

発掘作業はボランティアばかりではもたないので、毎日4人の作業員に給料を払って雇っているのだ。さらに、スコップ、探査のための鉄棒、金づち、手袋、マスク、作業靴など、作業のための必需品がある。さらに、現場は暑くて厳しい環境なので、熱中症にならないよう、水や氷、ゲートレード、虫よけ薬に日焼け止めなど、買わなくてはならないものもたくさんある。クラウド・ファンディングもやってみたが、手間がかかりすぎて大変だったという。いまはおもに寄付された古着を売ったり、バザーで食べ物を売ったりして、継続的に資金を得ている。それらをコーディネートするのもルシアの仕事だ。

ルシアに、実際に発掘現場に行ってみたく頼むと、さっそく警察の許可をとってくれ、発掘現場に通っているメンバーを紹介してくれた。

サンタ・フェの丘

現場のサンタ・フェの丘は、ベラクルス市の中心街から車で20分ほどの市郊外にある。幹線道路から入ってすぐの公団住宅地の一角のコンビニが待ち合わせ場所だった。朝8時半、市警

察、州警察、連邦警察のパトカーが次々に着き、さらに人権委員会から派遣された職員2人と、ソレシートのメンバーが乗ったバンが到着した。

ところがそこで、「日本人の女が来るとは聞いていない、許可がないと中に入れるわけにいかない」、という話になった。ルシアが連絡を取った警察の担当者から、現場の担当者に話が行っていなかったらしい。メキシコではありそうな話。結局、確認が取れて出発できるようになるまで1時間も待たされた。せっかく皆そろっているのに、私のために作業が遅れてしまって申し訳なかった。

現場は、そのコンビニからでこぼこの泥道を車で10分ほど入った場所にあった。道の脇にある放牧場では牛が草を食み、塀の向こうは住宅用地、その隣には港から運ばれるコンテナのための物流倉庫がある。けっして人里離れた辺鄙な場所などではない。

こんな場所に、おそらく夜毎に、死体が運び込まれていた？ しかも、穴を掘るために掘削機を使った可能性もあるというのだ。ルシアが言うように、警察がグルになっていなければ、そんなことはありえない。発掘現場は、10ヘクタールほどの放牧地である。かつて砂の採掘場だったとかで、地面はほぼ砂地なので掘るのはたやすい。土地の持ち主は殺されてしまったそうだ。

黄色い立ち入り禁止テープが張られた内側の発掘現場の写真撮影は禁止だった。ただ、中に入って見るぶんにはかまわない、と言われた。後で聞いた話では、関係者以外で中に入れても



サンタ・フェの丘の遺体発掘現場。州警察が24時間警備

らえたのは私が初めてだったという。これまで来たマスコミ関係者はすべて外からしか取材させてもらえなかったそうだ。「記者じゃない」といったのがよかったのか。

遺体捜索の作業は、まず周囲に植生があれば、山刀で切り払って場所を開けるという作業から始まる。地面に長さ2.4メートルの鉄の探査棒を金づちでたたいて打ち込んでいく。

私もやらせてもらったが、砂地とはいえ、木の根や石もあり、けっこう力がいる。探査棒を最後まで打ち込むと、引き抜いて、それに付着している土の臭いをかぐ。地中に腐敗死体があれば、独特の臭いがあるのでわかるのだという。臭いがなければ、棒を抜いた後の穴に目印のための木切れを入れ、再び、50～70センチの間隔で、探査棒を打ち込むのである。

探査棒から少しでも怪しい臭いがすれば、ドン・ルーペと呼ばれる老人が、呼びだされる。ドン・ルーペはゲレロ州の出身で、自身も息子が行方不明になっており、ゲレロ州で遺体捜索の活動をしていた。ベラクルスには、遺体捜索活動のエキスパートとして、助っ人としてやって来ているのだ。

深刻な作業のはずだが、誰かが持ってきたラジオから陽気なダンス音楽が流れ、冗談も飛び交っている。近くで掘っていた人が、ドン・ルーペを大声で呼んだ。1メートルくらいの深さから、赤っぽく染まった土が出てきたのだ。「血液だ」という。遺体のほとんどが、黒ビニール袋に包まれた形で埋められているが、年月が経



おそろいのTシャツのソレシートのメンバー女性。背中に
Búsqueda con dignidad y respeto(尊厳と敬意のある捜査)。

つうちに袋が破れてしまい、腐敗した死体から血液や脂肪が流れ出て、周囲に広がるのだという。触ろうとすると、「感染するから、手術用の手袋をしていないとダメだ」といわれた。「独特の臭い」というが、私には枯れ葉の腐った臭いと区別がつかない。

その脇では、2人1組で掘り返した砂をふるいにかけて、骨のかけらを探していた。小石も木片も同じように見えるが、小指の先ほどの骨片をドン・ルーペは一目で見つけていた。ちなみに現場で発掘作業を行っているのは、ドン・ルーペを入れて、ソレシートからの4人である。そのうちのひとり、30代のダニエルは、友人が行方不明になっていた。それが縁となって、ソレシートで仕事をするようになったという。

発掘現場を警備する州警察官の2人も交代で、重そうなライフル銃を担いだまま、汗だくでスコップで掘る作業を担当していた。人権委員会から派遣されてきた男性も、慣れた手つきで金づちをふるっていた。後で聞くと、州警察官も人権委員も、護衛と同行のためにいるだけで、作業に参加する義務はないそうだ。それでも、懸命に捜索している会のメンバーの姿を目にすると、ただ見ているだけではおれなくなるのも当然かもしれない。

血液らしい土が出た場所は、深さ1.5メートルくらい掘ったところで、決定的なものが出てきたらしい。しかし、何が出たか見せてもらう前に、穴は埋め戻されてしまった。民間団体の側にできるのは、遺体を発見するところまでである。

遺体を掘り出す作業は、司法警察の検視官らの仕事である。素人が下手に触って遺体を損傷してしまっただけならいいからさ。遺体や、それを包んでいる黒ビニール袋が出てきたら、検視官らが到着するまでは、犯人やあるいは野生動物などが来て荒らしてしまったりすることのないよう、埋め戻しておくのだという。

(次号に続く)

政治危機に再び燃え上がる抗議の叫び、大統領と議員の辞職を要求する国民

新川志保子

9月10日から22日までレコムでグアテマラ視察を行ったが、グアテマラは政治危機の真ただ中であり、大統領と議会への大規模な抗議行動が続いていた。9月20日にはゼネストが行われ、都市部から地方まで全国規模で抗議行動が行われた。

政治危機の発端

この政治危機のそもそもの発端は、8月に現大統領であるジミー・モラレスがグアテマラ無処罰問題対策国際委員会 CICIG のトップであるイバン・ベラスケス(コロンビア人)を「ペルソナ・ノン・グラタ」として国外退去を命じたことに始まる。

CICIG は、グアテマラ政府と国連の合意により設置された国際的独立調査機関で、その目的は影の権力にまでなっている犯罪組織ネットワーク(軍関係、政府機関、司法機関を含む)の捜査、その法的処罰や解体を進めるべく、検察・警察他の国家機関に協力し、司法機関強化を支援し、政策の勧告を行うことである。2007年9月に活動を開始した。そのマンデートはこれまで5回延長され、2019年の9月までとなっている。

CICIG は、2015年に「ラ・リネア」と呼ばれる犯罪ネットワークによる大規模な関税汚職を告発した【そんりさ154号】。このネットワークの頂点に当時の大統領オットー・ペレスがいたことで、怒った国民が抗議デモを行い、大統領を辞任に追い込んだという経緯がある。ペレスは裁判にかけられるために拘

留中である。その後の総選挙で大統領に当選したのが現在のジミー・モラレスだった。コメディアンで政治の経験はまったくなかったが、汚職追放をキャンペーンに掲げ、それが汚職まみれの既存の政治政党にうんざりしていた人々の支持を集めたのだ。

だが、人々が彼に失望するのも早かった。彼の政党である国民統一戦線 FCN は退役軍人会が作った政党で、軍・組織犯罪ネットワークと深い関わりがある。そしてモラレスはその影響下にあることがすぐに明らかになったからだ。しかも、モラレスの兄と息子が詐欺、マネーロンダリングなどの罪で逮捕され、裁判にかけられたこともさらなる国民の不信を煽った。

なぜモラレス大統領が CICIG のトップを国外退去させようとしたかという、彼が大統領に選ばれた2015年の総選挙での選挙資金の不正について CICIG が調査しており、その過程でモラレスも選挙資金法違反をしたことが明らかになったからだった。検察は大統領の不逮捕特権剥奪を議会に要請していたが、これは議会で否決されている。

モラレス大統領のこの突然の発表には世論が反対し、閣内でもこれに抗議して保健相とその副長官ら三人が辞任する事態になった。ベラスケスの国外退去処分に対抗した外相も更迭された。国連でもこの決定への非難決議が出された。結局憲法裁判所が、国外退去措置命令を停止処分とする決定を下し、イバン・ベラスケスは国内にとどまることになった。



憲法広場に集まった人々（新川撮影）



ルーズベルト市場の売り子たちもデモ行進（新川撮影）

刑法の改悪

さらに、9月13日、独立記念日の2日前に、議会は158議席中107人の議員が賛成し、刑法改正案を通してしまった。この改正、いや改悪は、10年以下の懲役刑に対し、保釈金を積み積れば釈放されるというものだった。これが適用されれば、10年以下の懲役とされる404の犯罪が対象になり、これは刑法に規定されている犯罪の89%を占める。選挙資金法違反はもとより、密輸や強盗、レイプなど多岐にわたる犯罪が一定の保釈金さえ積み積れば刑務所入りを免れることになる。事実上ほとんどの犯罪者が野放しになるということだ。そして、この改悪でもっとも利益を受けるのが、拘留中の前大統領のオットー・ペレス、そして今回のCICIGの調査で選挙資金法違反を犯した政党役員や大多数の議員らだ。

与党FCNだけでなく、グアテマラのほとんどの政党が選挙資金を犯罪組織からの黒い金に頼っているのは周知の事実だ。この改悪は、大統領だけでなく自分たちも罪を免れるために政党と議員が結託して行われたというわけだ。

このニュースはすぐにグアテマラ中をかけめぐり、国民の怒りは頂点に達した。そして首都や各県都、主な市町村で抗議行動が繰り広げられた。メディアはテレビやラジオ、新聞、インターネットなどでこぞってこれを非難し、107人の議員を「汚辱のリスト」などと顔写真付きで報道した。各県では、その県出身議員の引き伸ばした写真を立て看板にして、糾弾する集会も開かれた。人権団体らは、議員は自分に直接の利害がある議案には投票できないという規定があることを理由に、この法改定自体が無効であると主張した。

この騒ぎの中、モラレス政権の内務相フランシスコ・リバスが財務相、労働相とともに辞任した。リバスはもと検察庁の副長官で、モラレスが組閣する際に米国などからの圧力で任命されたと言われており、モラレス大統領とその取り巻きにとって望ましくない存在であった。リバスの就任当初から、彼をやめさせようとする動きがあった。それにもかかわらず、リバスは市民警察の強化に努め、検察とCICIGにも協力的であったために、彼への妨害がエスカレートし、ついにこれ以上とどまることが難しい状況に追

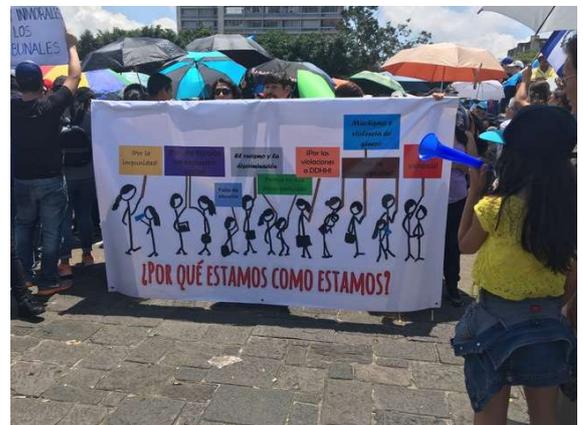
い込まれたためだ。リバスの辞任により、わずかに良くなってきた治安が悪化し、改革への動きが後戻りするのではないかと危惧されている。

ゼネストに

このような事態に、学生連盟や市民団体などが9月20日にゼネストを行うことを呼びかけた。そして国中がこれに呼応した。オフィスや商店、レストランなども休業にするところが多く、グアテマラシティの交通渋滞は近年凄まじいのだが、この日は朝から主要な通りも閑散として交通量がとても少なかった。首都の憲法広場には、朝から続々と人々や諸団体が詰めかけた。長時間バスを乗り継いで首都までやってきた農民発展委員会CODECAなどの農民・先住民族グループもいた。

日本のデモと違うのは、イデオロギーに関わらず皆グアテマラ国旗を手にしてしていることだ。そして多くの人が「汚職議員は早く辞任しろ!」、「ジミー・モラレスを裁判にかけろ」、「グアテマラはもう目覚めた」などと書かれた思い思いのプラカードを持っている。

地方からかけつけた先住民・農民団体が引き返したのと入れ替わるように、昼過ぎには市内4つの



工夫を凝らした横断幕で（新川撮影）



それぞれがプラカードをもって（El Periódico 紙）



ドブネズミの張り子も (Publinews.com)



学生連盟のデモ行進(Prensa Libre 紙)

ルートに分かれて行進してきた学生団体のデモ隊が太鼓やラッパを鳴らしながら入場し、憲法広場はさらに賑やかになった。大統領や刑法改悪に賛成票を投じた 107 人の議員らは「ドブネズミ」に例えられ、「ネズミ退治」を訴えるプラカードや、大きなネズミのぬいぐるみや張り子などを掲げて練り歩くグループも見られた。プラカードには、大統領や議員を非難する言葉や辞職要求だけでなく、メキシコの地震で被害を受けた人たちへの連帯の表明もあった。

あまりにも人が多くて、公園の中を移動するのも大変なほどだった。さらに夕方には楽団まで登場して演奏するなど、夜まで多くの人々が集まっていた。

首都だけではない、サンマルコス、ケサルテナンゴ、ソロラ、アルタベラパス、ウエウエテナンゴなどの県でも大規模な行進と集会があった。人権オンブズマン事務所によると、集まった人々の数は、首都で 12 万 5 千人、以外の地方で 8 万人ということだ。

2015 年に関税汚職が発覚した時、当時の大統領オットー・ペレスの辞職を要求して人々が街に繰り出し、ゼネストが行われた。その結果、大統領は辞任に追い込まれ、そして逮捕された。その記憶も新しく、国民が意思表示をすれば為政者はそれに従わなければならないのだ、ということが人々の中に根付いた。そして、今回はさらに大規模なゼネストとなった。広範なセクターからより多くの人々が参加したのだった。

また、今回のゼネストでひさしぶりにその存在感を発揮したのはサンカルロス国立大学の学生連盟であった。内戦中は都市部における軍事政権反対の活動を担った学生連盟だったが、内戦が終結した 1996 年以降、内部の問題で活動は停滞していた。しかし、執行部の刷新などによって再生し、今

回のゼネストでは、地方の分校からも学生を動員し、他大学とも連携して大規模なデモ行進を行った。

このような大規模な抗議には軍関係者などがデモ隊に潜入し、あたかもデモ隊がやっているかのように挑発行為や暴力行為を行うことが多々ある。しかし、この日は特にそのようなこともなく、ゼネストは終始平和裡に行われた。

20 日の夜、憲法裁判所は議会での刑法改正を「司法制度に対する重大な脅威」として、これを却下する決定をくださった。翌 21 日には、同じ議会が一旦成立させた刑法改正をお蔵入りにする案を賛成多数で通した。これで、ひとまずはこのとんでもない刑法改悪は実施されないことになった。

国民の要求の一つは通ったことになる。しかし、もう一つモラレス大統領の不逮捕特権を剥奪するという方はまだ実現していない。ゼネストの翌日の議会では、この案件がもう一度審議されたが、結局、反対多数で拒否されてしまったからだ。

また、仮にモラレスが逮捕され、裁かれることになったとしても、選挙資金法などを強化して政党が不法な資金を受け取れないようにしなければ、別の腐敗した人間が選ばれてしまうことになりかねない。状況はまだ混沌としており、今後事態がどのように推移していくかは不透明のまま。今回の危機の解決だけではなく、多くの人々が指摘しているように、現在の汚職とその免責・不処罰の構造を変えていかなければ、改革にはつながらないからだ。市民社会の闘いはこれからも長く続きそうだ。

参照 : Prensa Libre 紙インターネット版、El Periódico 紙インターネット版、Plaza Pública, BBC Mundo インターネット版など、それぞれ 8 月中旬から 9 月末まで。

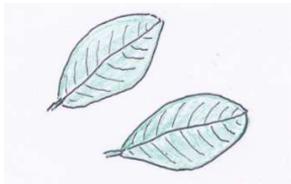
ボリビア民話：コカはみんなから求められました

栗原 重太

コカは南米原産の常緑灌木で、南米の多くの国々では、滋養強壮に乾燥させた葉を噛む習慣があります。また先住民の間では、病気を治療するための薬、儀式や占いにも日常利用されております。数ある薬草の中で、最も効果的な利用範囲の広い薬草の一つでもあります。しかし、その葉は麻薬コカインの原料ともなるので、日本をはじめ多くの国で、持ち込み使用は厳しく禁止されております。

今回は、どうしてコカの葉を噛む習慣が始まったのか、ボリビアの逸話の一つを紹介したいと思います。

コカはみんなから求められました



インカ帝国¹⁾の時代に、一人のとても美しい魅力的な女性がいました。男たちは、その女性を見るとうっとりとして、魔法にかけられたように後を追いました。その女性は微笑んでどんな男ともすぐに親しくなり、またすぐに離れて行きました。町や村を歩き回り、どこでも、誰とでも親しい仲になりました。

その女性を一目見た男は、妻のことを忘れその後を追いました。男たちは、彼女に結婚を申し込み、あらゆる物を貢ぎました。彼女は、決して一か所に留まりませんでした。決して同じ家に戻ることはありませんでした。決して同じ町に戻ることもありませんでした。いつも、ちがう男と一緒にいました。男たちは彼女に狂い、二度と彼女に会えないのを悲しみ、ある者は水に飛び込み、ある者は首を吊り、また崖から身を投げて自殺しました。

国中で女性のことが噂になりました。国の指導者たちは、女性を捕まえて拘束しようとしたのですが、彼女を一目見ると逆に魅了され、彼らもその後を追いました。男たちはその女性の後ばかり追いかけて、また狂って自殺したりしたので、畑を耕す者もいなくなりました。

国王インカもその女性のことを知りました。祈祷

師たちに相談して捕まえさせ、女性を見ました。何ということか、インカ自身も彼女に魅了されてしまいました。しかし、インカは国のためにと目をつぶって女性を殺させました。

祈祷師たちは、死体をその日のうちに六つ切断し、国中に埋めさせました。こうして男たちを狂わせた女性は地上から消えました。

インカは女性を思い出して、祈祷師たちに尋ねました。「あの美しい女の名は何とあったのだ」「コカという名前でした」

一年後、死体を埋めた場所から、葉の美しい見知らぬ植物が生えてきました。葉の表面は美しい濃い緑、裏側は薄緑、コカと呼ばれた女性の目にそっくりの葉を持った植物が生えて来ました。

インカは、女性を殺したのをたいそう気にしていました。祈祷師たちは、女性の死体の場所から植物の現れたのを見て、葉を摘んでインカに献上しました。インカはその葉を口に含んでみました。たちまち、不安も悲しみも消えて、元気を取り戻しました。

インカは国中にこの葉のことを知らせました。悲しみと不安にさいなまれていた国中の男たちは、争ってその葉を求め口に含みました。こうしてコカの葉を噛む習慣が始まりました²⁾。

注釈

- 1) 12世紀から16世紀半にかけ現在のコロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビア、アルゼンチン、チリのアンデス地方で繁栄した帝国。王はインカと呼ばれた。
- 2) コカの葉を噛む習慣は、考古学、民俗学的には、インカ帝国よりはるかな昔、数千年前から行われていたと言われる。

原本：さまざまな話—2、ラパス、ボリビア、2014

語り：シルベリア・ママニ・デ・ペレス、ラパス県アロマ郡パタカマヤ町、カウチティティリ村、ボリビア、1980年、ルシア・ロンド・デ・ウミリ、ラパス県パカヘ郡ラウラジョコジョコ村、ボリビア、1996年

編集：フェリックス・ライメ・パイルマニ

「知られざるペルー・ボレロの世界」

水口 良樹

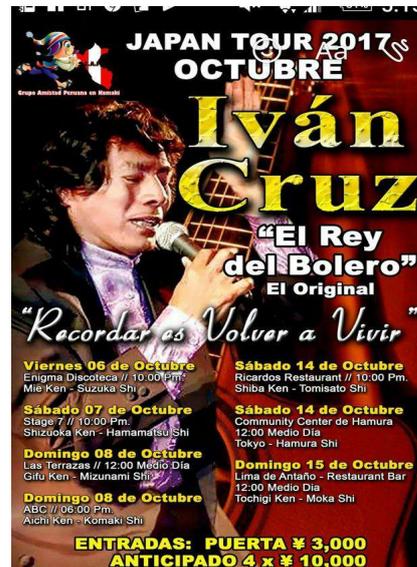
この 10 月にペルー最高のボレロ歌手の一人、イバン・クルスが来日することとなった。ボレロといえば、ラテン音楽が好き日本人の中でも、若い人はあまり聴くことが少ないレパートリーの一つだろう。1990 年代にルイス・ミゲルが大膽なアレンジで歌ったことでメキシコでは話題となったが、日本において若者がボレロに惚れ込んで熱く語り合うという光景を見ることは、なかなか難しい状況にあるのが現状だ。

ところが、在日ペルー人の中では変わらずボレロは人気だったりする。日本に住んでいるペルー人の多くは、アンデスやアマゾン地域よりも圧倒的に沿岸地域出身者が多い。なので、日本では在日ペルー人にとっての「我々の音楽」とはアンデス音楽ではなく、ムシカ・クリオーヤであった。そしてムシカ・クリオーヤのすぐ傍らにあった音楽がカリブ音楽であるボレロやソン、サルサといった音楽だ。

これらの音楽はペルーでも特に沿岸地域において非常に人気の高い音楽であるが、ボレロは沿岸部のみならず非常に広い地域で今なお愛されている音楽の一つである。それ故に在日ペルー人のイベントやパーティに行くと、サルサからレゲトン、ロック、バルスまで歌われる中に、必ずボレロが入る。そして多くの場合、そのボレロは会場中で熱唱されるのだ。

このようにペルー人にとって、意外とボレロは重要な音楽であったのだが、決してそのこと自体の知名度は高くない。ボレロと言えば圧倒的にカリブからメキシコにかけてが、黄金地帯であり、ペルー人にとってもそれは変わらない。それでもペルーにもペルーが誇る偉大なボレロ歌手たちがおり、彼らは今なお愛されている。

ペルーで活躍したもっとも有名なボレロ歌手といえば、「ボレロの王様」の異名を持ち、ペルーのみならずラテンアメリカで広く知られた歌手であるルーチョ・バリオスであろう。1935 年



イバン・クルス日
本ツアーの
ポスター

カヤオに生まれ、幼少期にリマ中心部のバリオス・アルトスに移りそこで音楽にのめり込んだと言われる。10 代で「勝利への階段」コンテストのファイナリストまで残り、フリオ・ハラミーヨにその才能を認められエクアドルに招待もされており、現地でバルスなどの録音を残している。1960 年代にはラテンアメリカでも知名度は上がり、すでに数々のヒット曲を生み出すボレロ歌手として、ペルーを代表する歌手の一人となっていた。2010 年に残念ながら亡くなっている。

今回来日するイバン・クルスもルーチョ・バリオスに負けない圧倒的な人気を持ったボレロ歌手であるが、聴取層がもう少し庶民へとスライドする。彼をたたえた二つ名も、ボレロ王だけでなく、「民衆のボレロ歌手」というものがあることから、それはよく分かる。確かにその少しハスキーな声で歌われる泣き節には、心をかきむしられるものがあり、ペルー・ボレロ界の現役最高の歌手の一人と言われるのも納得である。イバン・クルスのデビューはルーチョ・バリオスに比べると 10 年以上も遅い。彼がボレロを歌いはじめた 1970 年代半ばは、すでにボレロはラテンアメリカではサルサに取って代わられつつある時であ



ルーチョ・バリオス記念盤



アナメルバ・ミックス

った。それゆえイバンはボレロを歌うべきかどうか、迷いがあったという話もある。しかし、イバンによってペルーのボレロは蘇ったと言われるほど、彼はボレロで成功し、往年のボレロ・ファンの思いに応え続けた。彼はリマのカヤオ生まれであるが、祖父はアンデス地域出身でギターやチャランゴ、バイオリンなどを演奏する人であったという。そんな祖父とカヤオの豊かなムシカ・クリオーヤの音楽環境の中で、ペルーの沿岸部とアンデスの両者の音楽的要素を受け継いだことが、彼の音楽的な魅力をより奥深いものへとしたのかもしれない。

また、バルスとボレロの二方面作戦で成功した歌手に「愛のナイチンゲール」と呼ばれたペドリート・オティニアーノがいる。バルス歌手として成功しつつ、ボレロでも多数のヒットを飛ばした歌手である。彼が晩年歌ったバルスは、日本でもムシカ・クリオーヤのオムニバス CD として入ってきているので、聴くことができる。

女性ボレロ歌手では、1960年代初頭より活躍したボレロの恋人の二つ名で有名なアナメルバが特に有名だ。アンデス東側からアマゾンへと続くワヌコの出身である彼女は、エクアドルから出た世界に誇るボレロ歌手であるフリオ・ハラミージョと一時期結婚して子どももいたということでも有名であるが、その歌も非常に素晴らしい。歌手デビューはムシカ・クリオーヤを代表するグループ、ロス・キプスのメンバーとしてであった（ちなみにロス・キプスは素晴らしい女性歌手を多数世に送り出しており、その代表格がエバ・アイジョンである）。その後、アナメルバはソロのボレロ歌手として揺るがぬ地位を築いていったが、その人気はペルーのクンビアを代表するアグ

ア・ベジャがアナメルバ・ミックスのメドレーを歌っていることから垣間見ることができる。彼女は2011年にアメリカで亡くなった。

また少し年代が下がって、ボレロの貴婦人もしくはボレロの女王とも呼ばれた1980年に初録音を果たしたガビィ・セバージョスも、一時代を築いた歌手だ。彼女も1980年代以降非常に人気のある歌手の一人であった。しかし、昨年2016年に、長年連れ添った夫が亡くなり、その半年後に彼女自身も亡くなっている。

ペルーのボレロ・トリオの最高峰と言え、第37回でも紹介したロス・モルーノスだろう。実は1958年の結成メンバーの一人は、トリオの名付け親でもあった日系人のマヌエル・ヒロ・ミヤシロであった。彼はその後脱退して、ギターやレキント奏者として数々のボレロ歌手と共演した後、日本へと移住している。で、当のモルーノスであるが、メンバーの変遷を経つつも人気を保ち、1981年にはトリオ最高のヒット「モティーボ」を発表している。また有名な逸話としては、1976年のトリオ・ロス・パンチョスのペルー公演時に、トップ・ボーカルのオルビド・エルナンデスの急病にピンチヒッターとして代役出演したのが、モルーノスのトップ・ボーカルであるマヌエル・オルテスであった、というものだ。

このようにペルーのボレロ界にも綺羅星の如き素晴らしい音楽家たちがいるわけだが、最後にもう一人紹介しておきたい。それは、ペルーNo.1ギターの称号を持つムシカ・クリオーヤ最高のギタリストであったオスカル・アビレスの息子も、実はボレロ歌手として活躍しているということである。ラモン・アビレスはボレロ歌手として人気を得つつ、ヌエバ・フィエスタ・クリオーヤなどのコンフントによって、バルスなどのクリオーヤも歌い続けている。

ムシカ・クリオーヤといえば、バルス、ポルカにマリネラが中心とされるが、ボレロはその周辺部にありながら、ペルーの民衆音楽の重要な一翼を担う音楽として、今なお愛されている音楽なのである。ぜひ、この機会に非常にマイナーながら豊かな世界を持つペルーのボレロの世界にも耳を傾けてほしいと思う。

チラキレス CHILAQUILES

みなさんこんにちは。これまでのレシピで、多くの料理を覚えていて頂けたらうれしいです。

ずっと昔、メキシコ中部のアステカ人たちは、地元の素材や、メキシコのほかの地域にある材料を使ってさまざまな料理をつくってきました。今回はアステカ時代から伝わるとても有名な料理です。

CHILAQUILESの名は、chilliとaquilliというナウアトゥル語の2つの単語からできており、トウガラシでいっぱい、という意味です。

トマトソースに使うのは、赤いトマトでも青いトマトでもかまいません。アステカ人は赤いトマトをjitomate、青いトマトをtomateと呼んでいました。現在もメキシコ中央部では、2つの名前を使い分けています。ほかの地域、たとえばユカタンでは、どちらもtomateと呼んでいます。

ユカタンにもよく似た料理がありますが、材料も味も異なります。子どものころ、私の母も、このアステカ時代の料理をよくつくってくれました。

.....

■材料 4人分

- ・鶏のもも肉か、胸肉 400グラム
- ・赤いトマト大 4個
- ・タマネギ中 1個
- ・カッテージチーズ 60グラム（量はお好みで）
- ・サワークリーム 60グラム（量はお好みで）
- ・コリアンダー 大さじ1
- ・粉末オレガノ 小さじ1
- ・コンソメ 小さじ1
- ・ニンニク 1かけ
- ・トマトピューレ 100グラム
- ・トウモロコシのトルティーヤ7枚（コーンチップのように小さな三角形に切る）。トルティーヤが入手できないなら、市販のコーチップ（プレーン）を使ってもよい。
- ・塩 少々

■作り方

1) 鶏肉を鍋にいれ、コリアンダーとオレガノ、塩少々を加えて、柔らかくなるまで煮る。鍋からとりだし小さくほぐす。



ふつうは辛いトウガラシも使うのですが、日本人の好みに合わせて今回は辛くしていません。

日本で材料を入手できて手早く料理できて、お客さんにも家族にも喜ばれますよ。

-
- 2) トマトを3センチほどに切り、ミキサーへ。コンソメと皮をむいたニンニク、皮をむいて小さく切ったタマネギ半分、トマトピューレ、塩ひとつまみ、水も入れ、ミキサーにかけてよく混ぜる。
 - 3) ミキサーにかけたものをソースパンに入れ、焦げないように混ぜながら、少しとろみが出るまで、中火にかける。
 - 4) トウモロコシのトルティーヤは小さな三角形に切り、植物油で、弱火で揚げて、油をよく切る。
 - 5) トマトソースを4つの深皿によそい、そのなかに揚げたトルティーヤを加えて、ソースに浸す。トルティーヤが割れないように気を付ける。トルティーヤが入手できなければ、コーンチップスを使ってもよい。
 - 6) 揚げたトルティーヤとトマトソースをよく混ぜ合わせたら、細くちぎった鶏肉を入れ、カッテージチーズとサワークリームもかける。
 - 7) 残ったタマネギ半分を薄く切って、苦みを取るため水に2分ほどつけておく。キッチンペーパーで水を切って、トッピングする。

(1) 9月、メキシコを襲った二つの大地震

9月7日深夜、テワンテペック地峡沖合震源のマグニチュード8.1の大地震が発生した。被害は地峡部に接するオアハカ、チアパス、タバスコ、ベラクルス州に及んだ。オアハカ州の死者78名、チアパス州は16名、タバスコ州は4名とされる。

死者の7割強は地峡部の中心都市フチタン周辺に集中し、市庁舎崩壊のフチタンでは約2千戸が居住不能、死者45名となった。近隣のイシュタルテペック(死者10、居住不能千戸)、ウニオン・イダルゴ(死者8、居住不能600戸)などはグラウンド・ゼロ状態となった。砂州に位置する先住民族イコートの集落は道路寸断でアクセス不能になった。山岳部の先住民族ミへ居住区の人的被害は少ないが、被災住宅は相当数に達し、ハリケーンによる土砂崩で道路は寸断した。チアパス州の被災家屋はオアハカ州を上回る8万戸とされる。

9月19日昼過ぎ、ポポカテペトル山麓を震源とするマグニチュード7.1の大地震が発生した。32年前の大地震(死者推定1~4万)と同じ日で、午前中各地で避難訓練があったが、直後に本物の地震が襲った。死者360名超で、メキシコ市の死者230名の大半は倒壊ビルの下敷きとなった。

60以上に達する市内の全壊ビルの多くは、旧テスココ湖西側湖畔の硬・軟弱地盤移行地区に分布する4~7階の中層階の建物だった。全壊ビルの8割は無許可や違法建築だったという。屋上に無許可増築があった市南部のレブサメン学校(死者26名)は、Televisaによる実在しない少女フリーダ・ソフィア救出劇の舞台となった。一方、玩具・縫製など外国企業が入居するオブレラ地区の崩壊ビルは、25遺体収容後、アジア系労働者の安否確認のないまま、救援ボランティアを強制排除したうえで、重機による瓦礫撤去が行われ、更地にされた。

震源地に近いモレロス州の死者は74名、プエブラ州は45名とされる。ポポカテペトル山麓に位置するモレロス州ホフトラでは死者17名、800戸が



半倒壊したフチタン市庁舎



敷地に「真理追及」の横断幕



救援物資センター公示



救援物資にたかる既成政党

崩壊、プエブラ州アツァランでは天井落下で洗礼式参加の12名が死亡した。メキシコ市内以外で家を失った人は25万、2.5万戸全壊、4.5万戸が居住不能とされる。ポポカテペトル山麓の修道院群、 Cholulera・ピラミッド上のレメディス教会を含め、植民地期の教会など歴史建造物の被害も目立つ。

9月末時点で、支援金5億ペソが集まり、「がんばれ、メキシコ復興基金」が発足し、各政党も政党交付金の一部を寄付すると表明した。しかし、2018年の選挙キャンペーンを控え、援助が公平に分配される保証はない。モレロス州知事は支援物資集積所の一元化を試み、フチタン市長は選挙人カード持参者だけに救援物資を分配した。支援物資運搬の民間車両は軍検問や略奪に曝されている。

特別経済区に指定された地峡部では、2015年来の地域の統治機能不全状態が露呈し、軍は監視と住宅撤去、市民保護局は被害調査、エバンヘリコは「神の罰」の到来として支援物資配布し、人権・市民組織は参加型再建に向けた共助組織づくり、という奇妙な形で、支援復旧の作業が展開している。

主要出典:

<https://desinformememos.org/oaxaca-la-geopolitica-terremoto/>

<http://www.bbc.com/mundo/noticias-america-latina-41345526>

(2) マルドナドはどこにいるの？

8月1日、アルゼンチン南部パタゴニアのチュブート州クシュマンにあるマプーチェの「抵抗のプロフ共同体」は、国家警察による強制排除を受けた。2015年以来、ベネトン企業グループが所有する広大な土地の一角を占拠していた共同体の支援に来ていた28歳の青年サンティアゴ・マルドナドが行方不明となった。行方不明事件に対する抗議は、8月10日以降、国内で連日展開された。9月1日には、首都や国内主要都市などで50万を越す示威行動が行われ、欧米諸国でも連帯行動が展開された。

1994年の憲法改正で先住民族の集団的土地所有権は認知され、10年前から先住民領域再画定計画が始まった。約1,500共同体のうち、ほぼ半数の800共同体で作業が行われ、これらの共同体が先祖由来の土地として要求する面積は国土の約3%（約840万ha）で、2010年センサスの先住民人口比率2.4%と大差なく、過大な要求とは言えない。しかし、先住民共同体の土地が認定されたのは北部チャコのサルタ州の約40万haだけである。

2006年11月の法令は、住民共同体の土地画定作業が終了まで、占拠された土地からの強制排除を禁じている。この法令は2017年11月まで有効とされている。アムネスティ・インターナショナルによると、先住民共同体に関連する200件余の紛争の多くは領域をめぐる紛争で、そのうち24件では今回の事件のように治安部隊の暴力的介入によって死者や負傷者が出ている。北部の大豆栽培の拡張、南部の外国企業への土地分配などを積極的に展開するマクリ政権の発足後（2015年12月）、強制退去命令が判事によって多発される傾向がある。



5月広場の母親たちも「マルドナルドを探す」プラカード

主要出典：<http://www.santiagomaldonado.com>



¿DÓNDE ESTÁ SANTIAGO MALDONADO?

(3) ボリビア大統領は「母なる大地」の擁護者？

「彼らがどう思おうとも、道路を建設する」これは、8月13日、ボリビア・ベニ県トリニダーでの式典で「母なる大地」の擁護者を自認するエボ・モラレス大統領が発した言葉である。大統領は道路建設反対グループを「植民地主義的な環境保護主義者」、「先住民運動の敵」とまで非難している。式典では、TIPNIS不可侵性を謳った法第180号廃止と、TIPNISの保護と統合的持続可能な発展に関する法第266号公布が宣言された。

TIPNISは、コチャバンバとベニ県にまたがるインシボロ・セクレ国立公園先住民領域の略称である。2010年、政府はコチャバンバ県ビジャ・トゥナリとベニ県サンイグナシオ・デ・モホスを結ぶ道路計画を発表したが、それはTIPNIS領域を横断していた。2011年8月、道路計画に反対する住民はトリニダーから首都まで行進した。抗議行動を受け法第180号が公布された。2012年、政府主催のTIPNISでの事前住民協議では、域内69共同体中58共同体が法第180号廃止に賛同したという。2012年度に第I、III区の道路建設は始まったが、TIPNISを横断する第II区（177km）では未着工だった。法第266号は道路建設着工のゴー・サインである。

計画原案は、石油資源開発を目的として計画された可能性が高く、第I区道路の完成以降顕著となったコカ違法栽培をさらに誘発しかねない。環境保護派は領域を通過しない代替道路案を提示している。先住民共同体などで構成される領域防衛連盟や、環境保護組織であるソロン財団などは、TIPNIS横断道路、北ラパス県のバラとチェペテのダム建設、石油・鉱山開発などによる地域の生態系の破壊に繋がるとして、国立公園の自然文化遺産を防衛する運動を展開している。

主要出典：<https://es.mongabay.com/bolivia-2017/08/evo-morales-promugla-ley-elimina-la-intangibilidad-del-tipnis/>

<http://www.bbc.com/mundo/noticias-america-latina-40942121>

★ボリビア・ソロン財団代表らによる講演の告知★

【パブロ・ソロン／マリー・ルー講演ツアー】

10月27日（金）東京 午後6時半 連合会館

10月30日（月）京都 午後6時半 同志社大学

10月31日（火）大阪 午後6時半 エルおおさか

転職を機にレコムの活動に関わる余裕がなくなって、細々と参加させていただいていきます。今年は、あきらめかけていた待望の子宝に恵まれて、ますます細々です。以前から思っていたことなのですが、グアテマラでは女性たちの集まりを催すと、みんなが子ども連れで参加していました。当時、私は独身でしたが、それでも本来はこうあるべきではないかと、強く思ったことでした。子どもが生まれてから、参加者の了解を得て、子連れで謝金が出る委員会に参加しました。日本でも、そういう場面が増えてくるといいなと、今また強く思います。

片岡桂子

次回「そんりさ」印刷作業は東京で、2018年1月14日（土）

発送作業は関西で、2018年1月21日（土）の予定です。

参加いただける方は、recom@jca.apc.org まで連絡ください。

Vol. 161 コロンビア革命軍の最後	Vol. 157 ニカラグア・ワスパンの今
Vol. 160 サパティスタ・芸術と科学	Vol. 156 グアテマラ戦時下性暴力裁判
Vol. 159 グアテマラのアフリカ系	Vol. 155 メキシコ・ナルコ街道ゲレロ
Vol. 158 コロンビア・和平の陰の暴力	Vol. 154 グアテマラを揺らがす関税汚職

メーリングリスト

レコムに入会（もしくは購読）すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、メールアドレス、自己紹介メールを添え、recom@jca.apc.org まで、ご一報ください。メーリングリストに登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

会員の種類

☆会員	: 年 8,000 円	…会運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
☆学生会員	: 年 5,000 円	…会運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
☆賛助会員	: 年 10,000 円（一口）	…総会参加、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
☆購読会員	: 年 4,000 円	…『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15

太田方

TEL 075-862-2556（留守電）

お問い合わせは、E-MAIL、手紙、もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。

ホームページ: <http://www.jca.apc.org/recom>

E-mail : recom@jca.apc.org

Facebook : <https://www.facebook.com/recomsonrisa/>

郵便振替口座 : 00110-7-567396

日本ラテンアメリカ協カネットワーク

レコム口座 108 万 7609 円

グアテマラ基金 169 万 6049 円

(2017 年 10 月現在)

そんりさ (SONRISA) 162 号

2017 年 10 月 14 日発行

日本ラテンアメリカ協カネットワーク (RECOM)

定価 400 円